

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

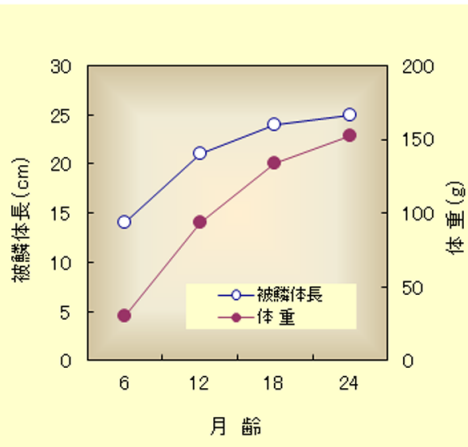
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命: 2歳前後
成熟開始年齢: 9カ月(一部)、12カ月(100%)
産卵期・産卵場: 10月～7月(盛期は3～6月)、沿岸域
索餌期・索餌場: 周年、沿岸域
食性: 動物プランクトン等
捕食者: 中大型浮魚等

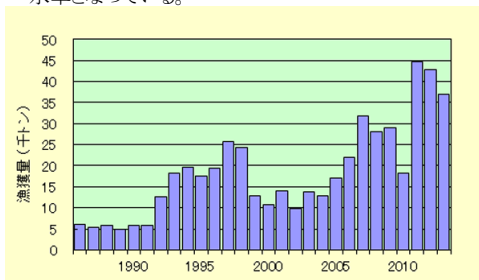


漁業の特徴

主にまき網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網、高知県では多鈎釣りでも漁獲される。シラス(仔稚魚)期は船曳網で漁獲される。外国船による漁獲はない。

漁獲の動向

宮崎県～三重県の漁獲量合計値は、1985～1991年は0.5万～0.6万トン台であったが、1992～1998年に増加し、2.5万トン前後となった。1999～2004年は1.0万～1.4万トンまで減少したが、その後増加して2007～2009年は3.0万トン前後となった。2010年は2.0万トン以下となったが、2011～2013年は、4.5万トン、4.3万トン、3.7万トンと過去最高水準となっている。

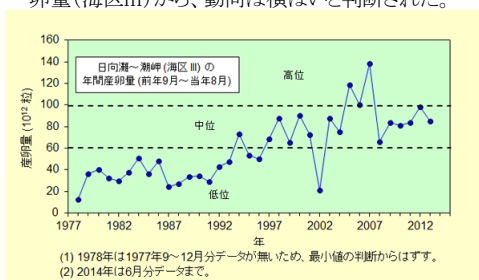


資源評価法

漁業に依存しない産卵調査結果から算出した産卵量を資源量指標値として採用し、産卵量の推移により、本資源の水準及び動向を検討した。水産総合研究センターと各都県水産研究機関の共同による改良型コルバックネットの鉛直曳網採集結果から緯経度30分目で集計された月別産卵量を用いて、年間産卵量を前年9月～当年8月の月別産卵量の合計値として算出した。対象海域は日向灘～潮岬(海区Ⅲ)とした。

資源状態

年間産卵量(海区Ⅲ)は、1978年以降増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にある。1990年代前半までは20兆～60兆粒であったが、1990年代半ばから、例外的に低かった2002年を除いて、60兆粒を超え、2007年は過去最高の139兆粒に及んだ。最近5年間(2009～2013年)は、80兆～100兆粒の範囲にある。過去36年間(1978～2013年)の年間産卵量(海区Ⅲ)の最大値と最小値の間の範囲を三等分し、高位、中位、低位の水準を定義すると、2013年の産卵量は中位と判断された。最近5年間(2009～2013年期)の産卵量(海区Ⅲ)から、動向は横ばいと判断された。



管理方策

最近年の高い漁獲圧の下でも資源量指標値である産卵量(海区III)は高位に近い中位水準を保っている。このため、再生産は順調に行われており、長期的な漁獲量の増加は漁獲圧のみならず資源の増加も反映していると考えられる。従って、現在の漁獲圧が資源状態に悪影響を及ぼすとは考え難く、引き続き資源の有効利用を図るべき状況にある。漁獲量と資源量指標値として産卵量が利用できるため、最近3年間(2011～2013年)の平均漁獲量(宮崎県～三重県)と最近3年間(2011～2013年)の産卵量(海区III)の変化率から、ABClimit、安全率0.8としてABCtargetを算出した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	42千トン	$1.0 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.01$	-	-
ABCtarget	33千トン	$0.8 \cdot 1.0 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.01$	-	-

- ABC算定規則 2-1) によつて、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bは資源量指標値の傾き、lは資源量指標値の平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 日向灘～潮岬(海区III)の年間産卵量を資源量指標値とした
- 2013年の産卵量は過去36年間(1978～2013年)で中位水準と判断された
- 最近5年間(2009～2013年)の産卵量から動向は横ばいと判断された

管理方策のまとめ

- 最近年の高い漁獲圧の下でも資源量指標値である産卵量(海区III)は高位に近い中位水準を保っている
- 再生産は順調に行われており、現在の漁獲圧が資源状態に悪影響を及ぼすとは考え難い
- 最近3年間(2011～2013年)の平均漁獲量(宮崎県～三重県)と産卵量(海区III)から、ABClimitを算出した

執筆者: 高須賀明典・梨田一也

資源評価は毎年更新されます。